

## 季題寸言

(曲水8-1)

寒い／＼と帰つて来た父。待つてゐて火鉢の傍で甘栗をむく  
二十七と二十四の自分達兄弟。三人の冬はこの時温かい。

(冬の夜)

## ■大正12年

立春句座

(曲水8-4)

春立つや空をのぞける山椒の眼

十月九日 鈴木三千代宛(大阪市外吹田町上井一の八一)

東京目黒三六九

海野 厚一

大阪の新居よりの便り今日到着 父上はじめ安堵いたし候  
御主人はじめ御機嫌らしき御様子何より、久々の都住居何かと、  
物新らしき感に甲斐／＼しく御暮しの事と察しをり候 こちら、  
其後とも別にかわりし事もなく御安心下され度、なれど、父上  
は御病後の事故一時はなか／＼案じ候も震後の疲労もさしたる  
事もなく遅々ながらおひ／＼に恢復に向はれ候様、しかし充分  
の注意はいたしをり候 ことにこれからは寒さに向ふ事とて、  
思ひなしか今年の秋風は早くもすさびさうにて、この冬は一し  
ほの寒さと案じられ候が、あれほどの震火に家もつぶれず焼か  
れもせぬは何よりと申すべくありがたき事としみ／＼に存せら  
れ候

思へば八月末上京しくれしは何よりの仕合せにて、あの折父  
上に元氣が出で候は全くその許の力と、父上はじめよろこび合  
ひ、あの後、お札やら何やら長々手紙書きおくらんと存候を一

日二日の事にてあの大地震となりついそのまゝになり候を当時  
は幾度か残念に思出し候 入れかほりに萩間より御送り下され  
候卵は三十一日の午后到着、折返し御札状さしだし候へど或ひ  
は不達かとも今は考へ候 しかしあの卵にて大たすかりいたし、  
十ばかりは損れて着きしをその夜いり卵に造りしが、翌日の地  
震には、水近く置きしがさん／＼に埃かむり空腹をかゝえて、  
口惜くながめ候も今はなか／＼に面白く候。あの翌日よりより  
は、鶏卵など何処を求めてもなき中、せめても残りしものが、  
玄米の飯の度毎に父への唯一つの滋養物と相成しは当時どれほ  
ど心丈夫に存候しか、くれ／＼も御礼申上候

地震と申せずでに一ヶ月余りも過ぎし今日、この辺りは最早  
や平常通りの静けさにかへり候も一度市中に参れば まだ／＼  
一面の焼野原にてお互ひに記憶せるありし日の東京は、今は夢  
のまた夢に候 焼けのこりの建物を爆破する工兵隊の作業の爆  
音などいまなほ、日々にこのあたりまで聞こえまゐり、なほ時  
折は小さき地震揺れ来るなど、その都度にすぎましかりし一日二  
日頃の記憶を新たにいたし候。当時二三日の事にてその許も春  
樹も帰国のあとにてあのおそろしさをのがれ候はまことに幸運  
と申すべく、震後直ちに庭にのがれて揺りかへしをおそれつつ  
椅子の上にて幾度父上とそれを話し候ひし事か、翌日よりは暴  
徒来襲の騒ぎ食糧缺乏の不安それこれの度毎にいつも思ひ出候  
はその事に候ひし。この辺りもいまは避難者大分に入りこみ、  
不便極まりなきこの目黒あたりも一ヶ月にして二倍の人々と相  
成候やうに察せられ候

今日母上の手紙にてこの程中静岡の家の手伝なされし模様其  
他くわしく申しこされいろ／＼の意味にてよろこはしく安堵い